

書評へのリプライ

齋藤 剛*

はじめに

拙著を手にとって書評を書く労を取っていただいた土谷輪氏と、書評リプライについて打診していただいたコンタクトゾーン編集委員会に、まず深く御礼申し上げる。

本書は、中東や北アフリカと呼ばれる地域に暮らすムスリム（イスラーム教徒）の日常生活に関心を抱いている読者を念頭に置きつつ、文化人類学的アプローチに基づいてモロッコに暮らす人びとの生活と信仰の一端を提示することを目的の一つとしている。書評にも記されているように土谷氏は日本を対象として研究を進めていらっしゃるということなので、対象地域やテーマの違いを越えて土谷氏に本書を手にとっていただいたことに感謝申し上げたい。

さて、本リプライをはじめめるのにあたって、最初に確認しておきたいことが三点ある。

第一に、本リプライは、2019年1月28日に編集委員会からリプライについて打診を受けた時に最終校閲を残したほぼ完成版として送付していただいた書評に対するものであり、本リプライでの引用はこの版に基づいていることが挙げられる。引用に際しては、当該原稿では掲載頁数は未定であったため、本リプライでも頁数は記載していない。

第二に、書評に記されていることについて私から訂正しておきたいことがある。書評では「序章において理論的視座が提示され」ており、「第1章から第4章までの前半がベルベル人の特徴とその人的ネットワークおよび商業活動の描写」に充てられていると記されている。また各章の要約を扱った箇所でも序章の内容として「民衆イスラーム論」が取りあげられている。だが、こうした土谷氏による記述や要約の仕方とは異なり、本書において「民衆イスラーム論」を扱ったのは、序章ではなく第1章であるということをまず指摘しておきたい。さらに、序章と第1章が混同されていることが理由の一端となっているのかもしれないが、書評では序章についての言及がほとんどなされていないことにも注意を払っておきたい。それから、書評冒頭で「モロッコのシュルーフという地域を舞台に」と記していただいたが、本書の中でも記したようにシュルーフはベルベル系の一言語集団であって地域ではない。

第三に、これらの点とあわせて書評における内容紹介についてもあらかじめ確認をしておきたいことがある。土谷氏の書評における本書の要約は、「民衆イスラーム論」や聖者

をめぐる理論的考察を扱った第1章に半分くらいの紙幅が割かれたうえで、「全体に通底するキーワードとなるのは都市との対比における故郷と人的ネットワークであろう」というまとめの下に、第4章と第6章を詳しく取りあげていただいた。第4章と第6章を関連づけながら丁寧にまとめてもらっていることをとても有り難く思うし、おそらく土谷氏自身の問題関心と関連づけつつ、この部分を読み解いてさらに問いを提示していただいたのだと想像している。

その一方で、内容紹介としては、序章、2章、3章、5章、7章、終章などについては、2行ほどの紹介に留まるか、あるいはほとんど触れられておらず、限定的なものとなっている。書評においては、全ての章を網羅的に紹介しないといけないということでは必ずしもないかもしれない。しかし、少なくとも、後述するように本書の全体的な議論の流れの中で骨格をなす章であるのにも関わらず取りこぼされてしまっているものがある点が気にかかった。

さて、書評で提示していただいた疑問を私なりの表現も交えて大別すると、1) 扱っている対象の個別性と一般性、2) データの収集時期、3) さらなる研究の発展可能性という三点に関わるものとしてまとめられるかと思う。以下、この三点に沿って回答する。

1 対象の個別性と一般性をめぐって

評者である土谷氏には本書が民族誌であると書評冒頭でまず総括していただいた。そのうえで大きく三つの問いかけが提起されている。それらは、(1)「一般的な民族誌とは異なる点に関するある種の違和感」、(2) 本書において取り上げられるハーッジという男性に関連する問い（それは「ハーッジ自身が登場する回数は多くない」という指摘と「ハーッジという特異な対象に比重が置かれているのではないだろうか」という問いの二つから構成されている）、(3)「本文で述べられるような事象がハーッジの周囲やその村にのみ当てはまるのか、もしくはより広範な当該地域一般に当てはまることなのかが、一般論的な視点から描かれたものであるがゆえに曖昧になっている」という指摘である。

書評冒頭で土谷氏に本書を「民族誌」と形容していただいたことと本書の全体的な構成の二つを導きの糸として、第一の問いに応答したい。

本書で提示されたデータは、ベルベル系シュルーフ、さらにその中の一部族インドウツザルに属する人びとの生活や社会関係、彼らに関わる祭礼や儀礼などを主たる対象としたものである。この点において本書は、その内容から「民族誌」といえると私も考えている。その一方で、私が書名に「民族誌」という語を用いなかったという点に注意を払っておきたい。

これは、本書が一般に理解されている「民族誌」のスタイルを全面的に踏襲したものではないことに私自身が自覚的であることと、実験的な試みを伴った内容となっていること、そして一般読者に対してより開かれた一書となることを念頭においていたことに由来する。

さて、上に記したような意図をより具体的に反映している点の一つが、本書の全体的な

構成である。序章でも記しておいたように本書は、そもそもマクロな視点から始まり、章を進めるに従ってミクロな場へと焦点を絞り込んでいくという構成になっている。より具体的に言うと、インドゥザルの人々の社会関係を扱った前半部（第2、3、4章）と、彼らとの関わりの中での聖者信仰を論じた後半部（第5、6、7章）という二つのまとまりから本書は構成されているので、いわゆる「民族誌」的な事例は3、4章と6、7章にとくに見出されるということになる。

以上の点を踏まえて私が不思議に思うのは、土谷氏が書評において本書を「民族誌」と捉えて疑問を提起しているのにも関わらず、第7章についてほとんど触れていないことである。この点については別の角度から考えても不思議に思う。たとえば、土谷氏は、私が第1章で提示した「民衆イスラーム論」や聖者をめぐる議論についてかなりの紙幅を割いてまとめてくれている。この「民衆イスラーム論」を含めた第1章の理論的検討がもっとも直接的な考察の対象としているのは、第6章と第7章である。そして、普通に考えれば、最終章の手前に位置づけられた章において最も重要な議論が展開されているはずである。だが、書評においては、理論について詳細な紹介がなされる一方で、その理論を踏まえて集約的な議論が展開された第7章については、第6章との関わりで2行程度言及するのみに留まり、ほとんど等閑に付されてしまっている。私としては、理論の要約に留まらずに、理論設定を踏まえた事例の分析を土谷氏がどう捉えたのかという点にまで踏み込んで議論をしてもらえたら、書評としての意義が一層高いものになったのではないかと考えている。土谷氏が着目してくれた第6章や、前半部と後半部の繋がりとあわせて、本書の議論の骨子に関わる部分だからである。

さて、以上の点を確認したうえで、次に第二の問い、すなわちハーッジに関わる問いに答えてゆきたい。本書はその全体を通してハーッジとその家族や親族、出身村の人びとの事例や彼らとの関わりが織り込まれるように配慮した。これは本書の内容に一貫性をもたらすことを意図してのことである。

その一方で、ハーッジ個人を中心的に扱った章は、前半部の最後に位置する第4章と、聖者信仰に関わる後半部の最後に位置する第7章に限られる。つまり、社会関係を扱った第2、3、4章と、聖者信仰に関わる第5、6、7章のそれぞれの最後の章でハーッジという個人と関わる事例が集約的な形で扱われている。それゆえ、ハーッジの取り上げ方に注目して全体を眺めてみると当然濃淡があるということになる。

こうしたことから、全体の流れの中でハーッジという人物について見てみるとその取り上げ方は局所的に見え、土谷氏が述べるように「ハーッジ自身が登場する回数は多くない」ということになり、他方で、ハーッジに焦点化して構成された章に注目すると、「ハーッジという特異な対象に比重が置かれている」と判断されることになるのであろうと思う。

次に、第三の問いについてであるが、ここで「事象」という言葉で表現されたものが具体的に何を意味しているのかは明確に記されていないため、何を対象としているのか把握しにくく、回答もしにくいのだが、おそらく都市への出稼ぎ、故郷との紐帯、都市における社会関係などに関わる疑問なのではないかと想像している。

かりに私の想像する通りだとすると、これらのテーマをめぐる議論はハーッジの出身部族であるインドゥッザルを事例としたものである。だが、議論における私の主張はインドゥッザルに留まらず、スース地方内の他の部族にも広く当てはまるものと考えている。このように考えるのは、本書でも参照したJ・ウォーターベリー、A・アダムをはじめとしたシュルーフの出稼ぎに関する諸研究者が指摘しているところであると同時に、スース地方の中でもアガディール、タルーダント、ティズニート、アイト・バーハー、タフラウトなどにおいて私が実施して来た広域調査の経験に基づいている。

2 データの収集時期

データの収集時期に関しては、「本書で散見される語りの場面や情景描写などが如何なるタイミングで収集されたのか、(中略) 具体的な時間に関するデータが必ずしも全て明確には付随していない」という指摘をいただいた。

これは、全てのデータについて調査時期を逐一記載していないという点では、その通りである。ただし、序章において調査の実施時期について提示しているほか、とくに祭礼や儀礼などいつ実施されたのかという点が非常に重要になる出来事を扱った第6章や第7章については祭礼や儀礼の実施年月日を具体的に明示した。これらに加えて、引用が長くなる場合や、調査の時期について注意が必要な場合など、時期を示す必要があるとみなした箇所には本文や注の中で明記するなど、複数のレベルで調査時期について記載していることを回答として記しておきたい。

451

3 研究の発展可能性

土谷氏に「さらなる調査の可能性」という言葉で提示していただいた研究の方向性として、通信技術の発展をはじめとする社会の「情報化」がある。このテーマとあわせて、書評の別の箇所でも提示されているが関連するテーマ群がある。それらを一括してここで研究の発展可能性を示した問い／提言として捉えてみたい。それらの問い／提言は、(1) 「民衆イスラーム」を社会的・歴史的文脈の中に位置づけて捉えること、(2) スマートフォンの普及に代表されるような通信技術の革新と社会の「情報化」、(3) 祭礼と資本主義に関わるものである。

3-1 「民衆イスラーム」と社会的・歴史的文脈

ここで私が「民衆イスラームと社会的・歴史的文脈」という言葉でまとめなおした土谷氏の問いは、書評においては先に挙げた「データの収集時期」に関する段落の中に見出される。だが、その内容からみて、私はこれを今後の研究可能性に関わるものとして捉えられるのではないかと考えた。土谷氏による問いは以下のようなものである。

本書で大きく依拠される大塚が「民衆イスラーム」という概念を立論した背景にはそ

の当時の時代背景、社会的文脈があったと著者は繰り返し指摘しているが、そうした背景を持つ「民衆イスラーム」を、ひいてはベルベル社会あるいはイスラーム全体を捉えてゆくために、2001年の同時多発テロやその後のアラブの春と呼ばれる一連の動き、さらには近年のイスラム国（IS）の動きを経て、世界規模でイスラムを取り巻く状況が変化してゆく中で、どのような時代背景を前提とするのかによってイスラム以外の世界との接合の仕方、イスラム世界の相対的な在り方を考える一助となり得たのではないだろうか。

長い一文のため少し意味が取りにくいだが、この一文の主旨はおおよそ以下の二つの論点から構成されていると理解した。第一の論点は、9・11、「アラブの春」、イスラム国の台頭など、私の長期調査に相前後して起きた時代の画期をなす世界的な出来事と関連づけつつ本書の議論を展開すべきであったのではないかという疑問である。第二の論点は、それが「イスラーム世界」というものの特質を把握したり、あるいは「イスラーム世界」外との関係を構想するうえでの一助となるのではないかという見通しである。ここでは、とくに第一の論点について応答しておきたい。

引用文の中で「時代背景」という言葉で土谷氏が問うているのは、社会的・歴史的文脈であろうと想像している。本書の場合、聖者信仰と関連する諸現象を扱った第5、6、7章より前の章が、その社会的・歴史的文脈を明らかにすることも企図したものでもあったことと、ここでいう社会的・歴史的文脈はあくまでもベルベル系シュルーフ、その中でもより具体的にはインドゥツガルの人びとが関わる「生活世界」を主たる対象としていることをまず回答の一環として記しておきたい。

もっとも、人びとの「生活世界」を論ずるのだとしても、そこで土谷氏が提起するように9・11、「アラブの春」、イスラム国の台頭など、中東諸国のみならず欧米諸国をも揺るがすような事象を視野に収めつつ議論を提示することも、一つの研究の方向性としてあり得ると私も考える。土谷氏が考える研究の方向性は「イスラーム復興」をめぐる議論や人類学的イスラーム研究において共有されている問題意識の一つでもあるからである。同時に、私自身も少なくとも「アラブの春」についてはモロッコでの経験からアプローチを試みている [Saito 2012]¹。

ただし、本書が主眼とする議論の範囲という限定の中においては、「アラブの春」のみならず9・11やイスラム国の台頭などのような世界的に注目される事柄は、本書で取り上げた事例やそこで登場する人びとに直接的な影響を与えるものではなかったというのが私の考えである。上記の土谷氏の引用文からも窺えるように、私は、大塚が「民衆イスラーム論」を構想した背景には、大塚がフィールドとしていたエジプトにおいてサダー・大統領暗殺事件が起きたことがあると本文で記した。これに対して私がフィールドとす

1 齋藤剛「アラブの春」はモロッコに何をもたらしたのか一覽書き」文部省科学研究費補助金・基盤研究 (B) 「「アラブの春」の社会史的研究—エジプト「1月25日革命」を中心に—」(代表：大塚哲也) (2014年7月26日、早稲田大学)。

るモロッコに眼を転じてみると、「アラブの春」をはじめとした土谷氏が挙げた出来事の影響はたしかにある。だが、私が直接交流を持っていた人びとにとってどうだったのかということもあわせて問われるべき重要な問題であると考えている。そして私が本書で留意したのは、後者の、自分が直接フィールドで交流した人びとの視点から考えていくという姿勢である。そのため、かりに自分自身が関心を有している出来事ではあるとしても、また人類学的イスラーム研究や中東研究において関心を持たれている主題であるということとは理解しつつも、本書では土谷氏が例示したような事象を取り上げていない。それらについては本書の議論とは別の問題系において論すべき主題と考えている。この点については、本リプライの「おわりに」において私の考えをさらに詳しく記したい。

3-2 通信技術の革新

次に、スマートフォンを活用した情報の流通を例として挙げつつ、「こうした近代的な技術が導入された現在（もしくは近未来）、シュルーフの人々の生活は、故郷との繋がりはどのように変化してゆくのかに、さらなる人類学的な研究の可能性を期待できる」と指摘していただいたことに応答しておきたい。

この指摘にも私は、先行研究における問題関心と私自身のこれまでの現地経験から同意するものである。まず、通信技術の革新やメディアの変化はこれまでの研究において注目されてきた主題の一つであり、近年の動向として注目される「アラブの春」は言うまでもなく、1979年の「イラン・イスラーム革命」を一つの象徴的事例としてしばしば論じられて来た「イスラーム復興」との関連、さらにはより巨視的なスパンにおいても論じられて来ている[Eickelman & Piscatori 2004(1996); Eickelman & Anderson eds. 1999, 2003]。

他方で、私自身の現地経験においても、現地調査開始以降、固定電話、ファックスしか見かけなかった状況から、インターネットカフェ、衛星放送、携帯電話の出現、その後のスマートフォンへの移行を含め、同時代的現象として目の当たりにし続けて来ている²。こうした自分自身のフィールド経験を踏まえて、私はアマズィグ運動との関連から故郷とインターネットを主題とした発表を国際会議で行なったが³、本書の中ではアマズィグ運動の展開は本書の議論の流れとの関係から副次的に取り上げるのに留めた⁴。

3-3 祭礼と資本主義

最後の論点となるが、土谷氏が日本を対象として研究を進めていることから、祇園祭を例として取り上げて「資本主義との関わり」や、消費化、観光化などの視点からの議論の可能性を示唆していただいた。また、こうした視点とあわせて「論旨からはやや外れる

2 齋藤剛「通信の技術革新は中東世界をどう変えたかーモロッコの宗教と暮らしの事例から」第12回神戸大学大学院国際文化科学研究科公開講座（ひょうご講座2011）「ネット社会を再考する一心の問題から社会変容まで」（2011年10月22日、神戸大学）。

3 Saito, Tsuyoshi “Homelands and Home Pages: Contemporary Amazigh / Berber Identity in Southern Morocco and Beyond,” (Panel Session: Peripheries Become Centers: New Media Borderlands in the Middle East), World Congress for Middle East Studies (WOCMES), Barcelona, Universitat Autònoma de Barcelona, 21, July, 2010.

4 モロッコにおけるアマズィグ運動については[齋藤 2006、2018]を参照。

が」という留保とともに「アサドが論じた世俗化に関する議論」から議論を構成する可能性にも言及していただいた。祇園祭が挙げられていることから、この指摘は現地語でムーセムあるいはアンムッガルという語で知られる「聖者祭」を扱った第6章に関わるものと推察している。おそらく土谷氏の研究関心に最も近い主題を扱ったのがこの章であり、それゆえに土谷氏の研究関心に沿った疑問が最も提示されているところではないかと考えている。以下、祇園祭を事例として挙げていただいたことに留意しつつ、本書で取り上げた「聖者祭」に関する問い／提言に答えてゆきたい。

さて、ここで挙げていただいた観光化、消費化、資本主義化、世俗化についても、いずれも重要な主題であると私も同意するものであるが、「聖者祭」を扱った第6章を通じて私が論じようとした主題は、上に挙げた主題とは異なっていると考えている。この点を確認したうえで、3点ほど付言しておきたいことがある。

一つ目は、インドゥッザルの故郷が資本主義経済にすでに歴史的に巻き込まれていることについては、本文の中で提示しているということである。二つ目は、祭礼を観光や消費と結びつけつつ捉える研究は観光人類学などにおいて多数存在するだけでなく、モロッコを事例とした研究においても蓄積があるテーマであることである〔堀内 1989; Reysoo 1991; Kapchan 2008a, 2008b〕。それにも関わらず、この事例を論ずるにあたってそうした視座から論じなかったのは、さほど魅力的な切り口には思えなかったからである。三つ目は、たとえば京都の祇園祭のような都市の大規模な祭礼を念頭におきつつ本書の事例を捉えることには、注意が必要であると思われることである。土谷氏が書評の中で記すように「今日の宗教実践は、実際のところ資本主義との関わりを除いては考え難い問題である」かもしれないが、たとえば個々の祭礼ごとに経済との関わり方は多様であるだろうから、それぞれの祭礼の実態に即した形で議論を展開する必要があると考える。

ところで、京都大学において長年にわたって教鞭を取られ祇園祭についても研究を進められた米山俊直先生は、モロッコの古都フェスを京都と比較する視点を打ち出している〔米山 1996: 271-280〕。モロッコの歴代イスラーム王朝が王都としてきたフェスでは、毎年、街の中心部に建設されたイドリース2世廟⁵を中心的シンボルとしてムーセムが開催される。私も参加をしたことがあるこのムーセムは街をあげて開催されるものであるほか、フェス内外のスーフィー教団などが参集し、奉納物や供儀獣を披露したパレードが繰り広げられる。また、近年では同じくフェスを開催地としてスーフィーのフェスティヴァルも開催されている〔Kapchan 2008b〕。後者は大西洋岸の都市エッサウィラで開催されるグナーワ・フェスティヴァル〔Kapchan 2008a〕と並んで国際的にも知られたフェスティヴァルとなっている。祇園祭との関連で土谷氏が論点として提示された観光化、情報化、商業化や資本主義との関わり、さらには世俗化といった主題との関わりで検討に値するのは、私が提示した事例よりも、たとえば、これらの都市を基盤としたムーセムやスーフィー教団が深く関与したフェスティヴァルであろうと考える。

5 イドリース2世は、モロッコにおける最初のイスラーム王朝であるイドリース朝の第2代国王である。

おわりに

書評へのリプライを終えるのにあたって、最後に述べておきたいことがある。今回、研究の発展可能性という言葉で私がまとめた土谷氏から提起していただいた主題群、すなわち9・11、「アラブの春」、イスラーム国の台頭、さらには「アラブの春」における民主化要求の主体として注目された「フェイスブック世代」と呼ばれる青年たちとメディアや通信技術の関係、観光化、消費化、世俗化などは、いずれも近年の中東諸国の社会的・政治的・経済的変動との関わりで、土谷氏のみならず多くの人びとが関心を持つ主題群であると思う。同時に、それらは今日無視することのできないきわめて重要なものであると私も考える。それゆえに、上に挙げた主題群の全てではないにせよ、本書とは別のところで私なりにアプローチを試みてきていることは本書評リプライの中でも示して来た通りである。

だが、ニュースでも取り上げられ、人びとの耳目や関心を集めやすい大規模な事件や事象との関わりから現地についての理解を深めるというアプローチとあわせて、社会・文化人類学的アプローチに基づく現地理解において私が重要だと考えるオルターナティブな発想は、メディアにおいてクローズアップされたり、人びとの関心を集めやすい現象や事件とは別に、現地で出会った人びとが、彼らの日常生活において何を重視し、どのような生活を送っているのか、そしてそれらの「世界大」的には重要な出来事が果たして彼らの生活の中で重要だったのかどうかを考え直すことに重きを置くものである。

本リプライの冒頭で、書評では序章の内容が割愛されていることに言及した。その書評で割愛された序章において、私は「ムスリム」と「移民」への関心が交錯するところで生まれる言説や問題関心への違和感を記しておいた。本書における議論は、こうした違和感や先に「オルターナティブな発想」という言葉で表現した私なりの問題意識などを下敷きとして育まれたものである。研究発展の可能性として指摘していただいた主題群が本書で主たる問題として取り扱われていない理由の一端は、以上のような問題意識に拠るものでもある。

土谷氏の書評における問いは、他の読者も抱くであろう問いと、研究の発展可能性を示してくれるものである。さらに、それだけでなく、それらの問いや問題提起への応答を通じて私が本書を通じて問題としたかったことの一端を改めて浮き彫りにする機会を与えてくれるものでもあった。書評を書くという骨の折れる仕事に取組み、貴重なコメントと質問を提起していただいた土谷氏に重ねて深く感謝申し上げたい。

<参考文献>

- 齋藤 剛 2006 「〈先住民〉としてのベルベル人?——モロッコ、西サハラ、モーリタニアのベルベル人とベルベル文化運動の展開」堀内正樹・松井健(編)『講座世界の先住民民族——ファースト・ピープルズの現在 04 中東』東京:明石書店、pp.59-97。
- 2018 「先住民化の隘路——モロッコのアマズィグ人に見る植民地遺産の継承と新たな民族観の創出」深山直子ほか編『先住民からみる現代世界』昭和堂、pp.143-

162。

堀内正樹 1989「聖者シャルキーの祝祭——中部モロッコのムーセム（聖者祭）について」『日本中東学会年報』4(1): 1-43。

米山俊直 1996 『モロッコの迷宮都市フェス』平凡社。

Eickelman, D. F. & J. Anderson eds. 1999 *New Media in the Muslim World: The Emerging Public Sphere 1st.Edition*). Bloomington: Indiana University Press.

—— eds. 2003 *New Media in the Muslim World: The Emerging Public Sphere (2nd. Edition)*. Bloomington: Indiana University Press.

Eickelman, D. F. & J. Piscatori 2004(1996) *Muslim Politics*. Princeton University Press.

Kapchan, D. 2008a The Festive Sacred and the Fetish of Trance: Performing the Sacred at the Essaouira Gnawa Festival. *Gradhiva: Revue d'anthropologie et d'histoire des arts*. 7: 52-67.

Kapchan, D. 2008b The Promise of Sonic Translation: Performing the Festive Sacred in Morocco. *American Anthropologist*. 110(4): 467-483.

Reysoo, F. 1991 *Pèlerinages au Maroc: Fête, politique et échange dans l'islam populaire*. Paris : Ed. de la Maison des Sciences de l'Homme.

Saito, Tsuyoshi 2013 Reflections on Political Change in North Africa and Its Influence on the European Union. 岩本和子・坂井一成（編）『EUの内と外における共生の模索』神戸大学大学院国際文化科学研究科異文化研究交流センター、pp.81-91.